
私の弟姫

赤井 鈴

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の弟姫

【Nコード】

N4542M

【作者名】

赤井 鈴

【あらすじ】

容姿端麗、成績優秀、運動も結構できる高校二年生、速水深雪。彼女はひとつ年下の弟、千広を溺愛していた。ある日の朝、いつものように弟の部屋を訪れた深雪。だが、そんな彼女の目に飛び込んできたのは、弟によく似た女の子！？

第一話 ある日の朝の出来事

時刻は午前六時三十分。息を殺し、足音をたてないように気を付けないが私は可愛い可愛い弟の部屋に向かう。そう、起こさないように……。

無事ドアの前に到着。ここからは今まで以上に慎重にことを運ばなければならない。

トン……トン……

「……千広？ 起きてる？」

軽くノックをし、小さな声でまだ寝ている筈の弟に尋ねてみる。返事がないところを見ると、予想通り寝ているようだ。

まずは第一関門の突破に成功。

「……入るね？」

私はそつとドアを開け、部屋の中に身体を滑りこませた。

千広の部屋は非常にシンプルで勉強机とベッド、そして本棚がひとつだけで、あとはクローゼットがあるくらいだ。ごちゃごちゃした私の部屋とは対称的である。だが、それ故に薄暗い早朝でも歩きやすくて助かるのだ。

「寝てる……よね？」

ここで起こしてしまつては全てが台無しになってしまうので、私は慎重にベッドに近付いていく。そして……到着。ミッシヨンコンブリート。

そこには、すーすーと穏やかな寝息をたてて眠る千広の顔。今日も可愛いらしい寝顔を見せてくれる私の愛しい弟。

これは私の日課であり、至福の時間だった。

二十分程過ぎただろうか。名残惜しいがそろそろ起こさないと目覚まし時計が鳴ってしまふ。それは駄目。だって、この子を起こすのは私の役目だから。

私はいつものようにそつと千広の身体を揺すって起こす

「千広、朝だよ？ 起き」

筈だったのに。

むにつ

「あれ？」

なんだか変な感触が？

違和感を感じ、そつと掛け布団をめくってみる。と、見慣れたチエックのパジャマと見慣れない胸元の膨らみが目についた。

「……………」

えーと、これは何だろう？ スズが潜り込んだのだろうか？ だとしたらなんて羨ましい……

ちなみに、スズというのはうちでペットとして飼っている子猫のことだ。

私は確認のために軽くその部分をつついてみることにした。

「うう……………」

「っ！？」

千広の口からなまめかしい声が漏れる。…………もう一回。

「んっ……………」

「…………ごくり。」

あ、いや、これは確認のためだから。そう、あくまでこれは確認に必要なことからやっているだけ。大事なことなので二回言わせて貰いました。

…………ところで私は誰に言い訳してるのだろうか？

「スズじゃないみたいだけど……」
「ならば何なのか？ それには開けてみないとわからない……よね？」

千広のパジャマのボタンをひとつひとつ外していき、胸元にかかっているだけになった布を横にずらす。そして、現れる白い肌。つまり、何も入っていないかったことになるわけで……。

「千広に胸がある？」

……………えっ？

「えええええええええっ!？」

気が付くと私は大きな声で叫んでいた。

目の前の光景が信じられなかった。

昨日までは確かになかった筈だ。

何度も見て、何度も触れてきた私が言うのだ。間違いはない。千広の胸にあんな脂肪の塊は絶対になかった。

それなら今、私の目に映っているこれは何なのだろうか？

「……女の子の胸よね？ 本物？」

「何が本物なの？ 姉さん。というか、朝早くから人の部屋で騒がないでほしいんだけど……」

ごめんね、千広。朝からうるさかったよね。

……あ、ついでにご近所の皆さまもすみませんでした（棒読み）。私の声で目を覚ましたらしい千広は、眠たげな目を擦りながら身体を起こし、こちらを見てくる。

ああ、そのとろんとした目で見られたらお姉ちゃんもうつ……。

「……姉さん？」

「ひゃいつ！？ な、何でもないから、何でも。……じゃないわ！

千広、胸、胸！！」

「胸？ ……姉さん、何でボクのパジャマがはだけてるの？」

「そこはいいから、胸を見てー！」

そこは気にしなくていいの。ええ、本当に。

「えっと、なんか腫れてるね。女の子みたい」

そう言って自分の胸を揉みだした千広。その度に、その柔らかそうな胸が形を変えていく。

……見てたら鼻血が出てきた。

やがてその手の動きが止まると千広は何やら考え始める。そして

「……お休みなさい」

再び布団の中に潜り込んだのだった。

「千広！？ 大丈夫！？ しっかりしてっ！！」

「んー、大丈夫だよ姉さん。ここはまだ夢の中だから起きたらきつと元通り」

「……なるほど」

そうか、ここは夢の中だったのか。それなら千広に胸があっても仕方がない。仕方がないったら仕方がないのだ。

ならば、私がこの後することはただひとつ。

「ねえ、私も一緒に寝ていいかな？」

「うん、いいよ。どうせ夢だから……」

よっしゃっ！！ 言ってみるものだ。夢の中とはいえ、千広と一緒に寝るのはずいぶんと久しぶり。というか、もうこのまま夢から

覚めないでほしい。

「お邪魔しまーす」

目覚まし時計を鳴らないようにして、意気揚々と布団に潜り込む私。夢の中の筈なのに、千広の温もりが不思議と感じられた。

まあ、結局夢じゃなかったんですが……。

朝御飯と呼びにきた妹の舞によって、私の幸せな時間は僅か三分で幕を閉じられたのだった。

……………くすん。

ちなみに、鼻血で枕を汚してしまったのは秘密。

第二話 家族裁判

「それじゃあ、まずはあなたの名前と年齢を教えてくださいかしら？」

「……速水千広、十五歳。高校一年生です」

「じゃあ、家族構成は？ 名前までお願いね」

「父の直樹、母の沙希。ひとつ上の深雪姉さん。中学二年生の妹の舞。それと小学三年生の弟の優に、子猫のスズの六人と一匹の家族ですけど……」

今現在、女の子になってしまったと思われる千広の本人確認をお母さんが行っていた。

さつき姉さんと呼ばれたので私は普通に千広だと思っていたけど、言われてみれば別人かもしれないのよね。

でも、あの絹のように艶やかな腰まで伸ばした黒い髪も、どう見ても女の子の子しか思えない可愛らしい顔も、そして透き通るような白い肌もみんな同じ。千広と同じ。

「じゃあ母さんが父さんと出会った成れ染めは？ これは千広にか話してないんだけど」

「……………」

「あら、わからない？」

「いや、ここで言っているのかなって思っている……」

なんだか言いにくそうに千広？ はお父さんの方を見ている。

……あれ？ なんだかお父さん顔色悪い？

「じゃあ私の耳元でなら話して貰える？」

「うん……………」

母さんにだけ聞こえるように何かを喋っているけど。……気になる。すごく気になる。舞と優も同じ気持ちのようだ。

やがて、話を聞き終えたお母さんは満足気に言ってくれた。

「うん、間違いなく千広ね。ごめんなさい、疑ってしまって……………」

「……うん、信じてくれてありがとう、母さん」

よかった……。やっぱりこの子は千広だったんだ。たとえ女の子になってたとしても。

……ん？ でも私はまだ胸しか見てないけど、下とかはどうなんだろう？

「ねえ、他に違うところはあるのかな？」

ちよつと聞いてみた。

「う、うん。たぶん下の方も女の子になってる」

「たぶん？」

「……初めて見たからわからない」

……まあ（ポッ）。

「ところで、今日はどうするつもりなんだい？」

今までじつと話を聞いていただけのお父さんが口を開いた。

「一応、学校には行っておこうかなって……」

「そうか……。まあ、千広が自分で決めたのなら止めはしないけど、無理はしちゃ駄目だよ？ 気持ちの整理がつくまで学校を休んでもいいからね？」

「……うん」

お父さんが心配するのもわかる。だって、千広の表情は暗いから。無理をして笑っているのが、わかるから……。

「千広……」

お父さんは席から立ち上がると、千広の背後に回った。そして優しく抱き締める。

ちよつとだけ、羨ましいと思った。

……えっ？　もちろんお父さんがですけど？

「いいかい？　千広。男の子でも女の子でも、お前が父さんと母さんの大事な子どもなのは変わらないよ。だから、怖がらないで」

「あつ……」

「父さんと母さんだけじゃない。深雪も、舞も、優も、みんなお前の味方だから。……おっと、ごめんごめん。スズもだね」

「にゃ〜ん」

自分を忘れるなどでも言っているかのようにスズが鳴いてみせた。
「辛い時はいつでも頼っていいからね？　お前はひとりじゃないよ」

「……ありがとう」

少しだけ千広に笑顔が戻った。そんな気がした。

いいところ取りだよ、お父さん。でも、ありがとう……。

うん、私は千広の味方。ずっとずっと守ってあげるからね。

「じゃあ、家族の絆を深めるために今夜は一緒にお風呂に入ろうか？　千広」

うんうん。家族の絆を

……あれ？

「いや〜、それにしても女の子か……。これで長年の夢が叶うな。楽しみだな〜。娘に背中を流してもらうのは父親のロマンだからね」

「なんだか話が違う方向に飛んでるような気が？　というか、私と舞は？　お父さんの私たちは女の子としてアウトなの！？」

一緒に入る気は全くないけど、いくらなんでもあんまりだ……。

「うふふふ、あなた？」

あ……、お母さん怒ってる。すごく怒ってる。

「ま、待ってくれ沙希。これは、その……」

「あなたたちはどう思う？ 母さんは有罪だと思うんだけど」

「有罪」

と、舞。

「有罪？」

と、優。たぶんよくわかってないと思う。

「有罪ね」

私も有罪に入れる。乙女のプライドを踏みにじった代償は重い。

「にやう？」

うんうん、有罪だよな？ スズ。よくわかってるじゃない。

「あら、スズもお父さんは有罪と思うの？ これで全会一致で有罪となるわ。ペナルティとして、今月のおこづかいは無しよ？ あなた」

「あんまりだっ！！ というか、スズはノーカウントじゃないのかな！？」

「お父さん酷いよ。スズは大切な家族の一員なんだよ？ ね、スズ？」

「にやうん」

そう言いながら、舞は千広の膝の上に座っていたスズを抱き上げる。

……グッジョブ、舞。

「……誰も味方はいないのか。無念」

よよよ、と泣き崩れるお父さん。ちよつと気持ち悪い。

「あの、ボクは別にいいけど……」

甘いわ、千広！ 女の子がそんなに無防備じゃ駄目なんだからね？

こうなったら私が一緒にお風呂に入ってしっかり教えてあげないと……。

「ほら、千広本人がいいって」

必死なお父さんを

「」「黙れ」「」

「……はい」

一喝。

とりあえず、私が一番最初を守るのはお父さんからになりそうだ。

それよりとつと千広から離れろ、この ピーーーー がっ!!

（おおそ娘が父親に向かって言うような言葉ではないため、自主規制とさせていただきます）。

第三話 学校へ行こう

「ん……、あつ。か、母さん……」

「もうちよつとだから我慢なさい？ ほら、母さんに任せて力を抜いて」

「う、うん。……痛っ」

朝ご飯を食べ終え、お父さんを仕事に送り出した（追い出した）後、千広は服を着替えるからと部屋に戻って行った。その際、まだ自分の身体に慣れてない千広のために、お母さんが付き添っている。そして、ここは千広の部屋の前……。

「あと少し、もう少しだから。頑張って」

「でも、ボクもうつ」

「んっ、ほらっ、全部入ったわよ？ ……それにしてもキツキツねえ」

「ひゃっ、まだ触っちゃ駄目っ！！」

……一体中で何が起こってるのだろうか？

隣にいる舞を見てみる。予想通り顔が真っ赤になっていた。たぶん私も同じようになっていた筈だ。

ちなみに優は居間で子供向けのアニメを見ていてここにはいない。

……よかった。本当によかった。教育上、これはよろしくない。かちゃっ

「さてと……。あら？ 二人ともどうしたの？」

不意にドアが開き、中からお母さんが出てきた。なんだかお母さんも顔が赤いような気がする。

「お、お母さん……。何をしてたの？」

「んー、見て貰った方が早いかしら？」

「……いいの？」

「うん？ いいわよ？ むしろ、あなたたちも見てくれた方が好都合ね」

……まさかのGOサイン。それならば、行くしかあるまい。
すーはー、すーはー。よしっ、行こう！！
いざっ、東の（部屋の方角的に）エデン！！

「……普通？」

「……うん、普通だね」

冷静に考えてみればありえないことだってわかるのにね。

「「……はあ」「」

……軽く自己嫌悪。

「あれ？ 姉さんと舞。二人ともどうしたの？」

「な、なんでもないんだよー？」

「そ、そうだよヒロ兄。なんでもないからねー」

「そう？ それならいいけど……」

そこにいたのは、制服に身を包んだ千広。今までに何度も見てきた、黒い学生服姿。

……ちよつと息が荒いのが気になるけど。

「どうかしら？ 上手に出来たと思わない？」

そう言うお母さんは満足気だ。だけど

「う、うん。でもこれ、いつものヒロ兄と同じだよな？」

舞の言う通り、千広は普段と変わらない格好をしているのだ。さほど驚きはない。

……まあ、相変わらず可愛らしいんだけどね？

「えっと、母さんにも相談したんだけど、とりあえず今日までは男のままでした方がいいかなって……。幸い今日は土曜日だから学校が終わるのも早いし」

「だから学生服に着替えさせたんだけど……」

「「……だけど？」」

どうしたのだろう？ 千広もお母さんも、なんとも微妙な表情を浮かべているのが気になる。

「実は、思ってた以上に胸が大きくて、そのままじゃシャツと制服が着れなかったのよ……」

「……………」

ふう、とお母さん。

「それでね、形が崩れたら大変だからあまりやりたくはなかったんだけど、そのままってわけにもいかないでしょう？ だから、胸に包帯を巻いてきつく締め付けて、無理矢理抑え込んでから着せたの」
ああ、なるほど。つまりさっき千広があげてた声はそれが原因だったのか。

ホッとしたような残念なような。

……………うん、実に残念。

「それじゃあ、かなり苦しいんじゃない？ 千広、大丈夫？」

「大丈夫だよ、姉さん。ありがとう。でも、やっぱり長時間身に付けておくのはきついかも……」

「そうね、母さんの見た感じでも、結構大きかったものね……。たぶん舞よりは確実に大きいと」

ガタンッ

それは突然のこと。音が鳴った方を向くと、本棚に寄りかかるようにしてなんとか立てているといった様子の舞。

「ま、舞。大丈夫？」

千広が心配そうに舞に声をかける。自分の苦しさなど忘れたように。

でも……、届かない。

「ヒ」

「ヒ？」

「ヒ口兄の裏切りもののおおおおおおっ！！」

そう言い残し、部屋から駆け出る舞と

「ちょ、ちよつと待ってよ!?　ねえ、舞っ!?!」

座っていたベッドから急いで立ち上がり、追い掛ける千広。

「あらあら、家の中を走り回ると危ないわよ」

続いてお母さんも部屋を後にする。

そして、ひとり取り残された私。

「……………どうしよう」

ゴンゴン

「ねえ、舞っ。お願いだから部屋から出てきてよ。舞はまだ中学生だから、これから成長期が来るって……………」

「うわー!ーん。ヒロ兄の馬鹿あぁあっ!-!」

「舞?　お兄ちゃんに馬鹿とか言っちゃ駄目よ?」

「……………このやり場のないムラムラ感、どうやって発散すればいいの?」

……………本当にどうしよう?!

「それじゃあ行ってらっしゃい。気を付けてね」

「うん、行ってきます」

「……行つてきます」

とりあえず、私と千広は学校に行くことにした。

『舞のことは、母さんがなんとかしておくわ』とのことなので、そちらの件はお母さんにお任せ。ちなみに優は、今日はお友達が呼びに来てくれて少し前に家を出ているらしい。なので今は、私と千広の二人だけ……。

いつもなら舞と優の二人とも途中まで一緒に行くので、家から千広と二人きりというのは新鮮だ。

二人には悪いけど千広を独占出来てよかったかなとも思う。

……そうだ。せつかく二人きりなんだから

「ねえ、千広。今日は手を繋いでいこっか？」

「えっ？ うん、別にいいけど……」

ちよつとだけ、雰囲気にも浸つてもいいよね？

「千広の手つてすべすべしてて気持ちがいいね」

「あ、ありがとう？ でも、なんだか恥ずかしいんだけど……」

「ふふっ」

繋がる、私の右手と千広の左手。柔らかくて温かい千広の手。

その手を離さないようにしっかりと握りながら、私は心の中でひとつだけお願い事をする。

これからずっと、千広と一緒にいられますように。

叶うと、いいな……。

「……ねえ、姉さん。そろそろ手を離してくれないかな？」

「んー、もうちょっとだけ……」

「いや、もう学校に着いたし……。ボクの教室はこっちで、姉さんの教室はあっちでしょ？ それにそろそろチャイムが」

キンコンカーンコン

「……遅刻だ」

千広が女の子になって、初めての登校日。私と千広は一緒に仲良く遅刻をした。

「いっそのこと、今日はサボって遊びに行っちゃおうか？」

「……行かない」

「えー」

第四話 着て、見て、触って

「それじゃあ今日はここまで。日直、挨拶を頼む。」

「きりーっ、気をつけー、礼」

「「「ありがとうございますー」」」

三限目の授業の終わりを告げる声。土曜日の今日は午前中のみの時間割となっていて、後は帰りのHRとその後の掃除が終わり次第解散となる。

……はやく先生来ないかな？

黒板よりも上に掛けられた、電波式のアナログ時計を見やる。その秒針は時を一秒一秒正確に、そして確実に刻んでいる。それに間違いないのだろう。

それでも、何故だか今日はそれがとても遅く感じられる。

いや、何故もない。理由はわかっていてるのだから。だって私は……。

「おーい、深雪ってばー。聞こえてないのかー？」

「……えっ？」

不意に聞こえた、私を呼ぶ声。その話ぶりから察するに、さっきから幾度となく呼んでいたのだろう。

「ごめん、ちよつと考え事してて……。それで、何かあったの？」

その声の主、小森春香に言葉を返す。

「いや、なんだか深雪の様子が朝から変だったからね。ちよつと気になって」

「深雪ちゃん、授業中もずつとうわの空だったし、何かあったのになって話してたの」

春香のそれに、一緒に来ていた白石理奈が続けて言う。

「やっぱりこの二人には気付かれてたか……」。

「まあ、大体予想はつくんだけどな」

「たぶんだけど……。深雪ちゃんの弟の、千広君のことでしょう？」

「今までにも何度かあったからねー。十中八九間違いないでしょ」

「……………」

なんだか馬鹿にされてるような気がする。でも、正解。

悔しくても言い返せないのが情けない。なんとなく切ないなあ……

…。

「おっ？ その反応を見るに、正解っぽいねー。ま、小学校からの幼馴染みに隠し事は出来ないってことで」

「……はあ、参りました。降参降参」

幼馴染み、侮り難し。

でも、私も二人のことは良く知ってるから結局はおあいこかもしれない。本人は気付いてないと思われるクセや好みの異性のタイプなんかもわかっている。

千広のことならもつと詳しいんだけどね……。ふふっ。

「でも、深雪ちゃん。私たちが力になれることがあったら協力するよ？」

「ありがとう。でも、もうちょっと自分で考えてみるから。それでもまだ駄目だった時はお願いするね」

「ああ、何でも相談してくれていいぞ？ あたしなら」

ああ、持つべきものは優しい友達。

「駅前のクレープハウスのクレープ三つで手を打ってあげるさ」

「……………」

その時は、ゴーヤとハバネロとシユールストレミングのクレープを奢ってあげるとしよう。うん、それがいい。そうしよう。

がらっ

「おい、HR始めるぞー。みんな席に着けー」

ドアが開く音。それに一瞬遅れて先生の声が教室内に響いた。

「おっと、先生がきた。じゃな、深雪」

「またね、深雪ちゃん」

「うん、また」

自分の席に戻る二人を私は目で見送る。その後、喧騒が落ち着くまで少しの時間を要してから帰りのHRが始まった。

……………はやく千広に会いたいな。

「ほら、着いたよ千広」

HRと掃除を終えて、私はすぐに千広の教室に向かった。千広の方も丁度終わったらしくて、いいタイミングだったと思う。

ちなみに、そっと教室内をうかがってみたけれど、いつも訪れる時と特に変わった様子はなかった。今日のところは大丈夫だったのだろう。

そして、学校からの家に帰る前。私と千広はあるものを買いに街にやってきていた。

「ここは……？」

「女性用の下着の専門店。千広、女の子になったんだから当然女の子用の下着がいるでしょう？」

「あ、そうか……。でも、ボク学生服だし、入れないと思うんだけど……」

「大丈夫大丈夫。最近はカップルの男女が一緒に買いにきたりもするって雑誌に書いてあったもの。だから、きっと平気よ」

「……知らなかった」

「うん、まあ嘘なんだけどね？　でも、少しでも千広が落ち着けたようだよかった。」

「ほら、早く行こつ？　時間なくなっちゃう」

「わ、待って、姉さん」

私は千広の手を取り、お店の中に入っていく。

ちなみに、ブラも買う必要もあるので、結局は脱いで計ってもらわないといけないと気が付いたのは入ってすぐのこと。

「えーと、トップが八十四センチの……。Cカップになりますね。そのサイズでしたらこちらです」

「……ありがとうございます」

計測を終えた千広と店内を見てまわる。と、可愛いもの、セクシ―なもの、様々な下着が綺麗に並べられていた。

「ねえ、アレ可愛いと思わない？」

「えっ、ちょっと派手だと思うけど……」

「そう？　似合うと思うんだけどなあ……。って、あら？　もう選んできたの？」

ふと、千広の持っていたかごを見ると、すでにいくつかの下着が入れられていた。だが

「うん、こんなものかな？　って思ったから」

「うーん、いくらなんでもこれは……」
あまり可愛くない。

見た感じでは、どれも飾り気のないシンプルなデザインものばかり。色も一色ものしかない。

「駄目かな？ 一応生徒手帳に書かれてるように、シンプルなものを選んでつもりんだけど……」

……ああ、なるほど。それでなのか。

しかもこれは、男の子に多い『着ればいい』の買い方。どうりで選ぶのが早いわけだ。

「もう少し可愛いのにしましょう?」

「えっ? でも……」

「そこまでしっかりと学生規約を守ってる子なんていないよ? それに、同じようなのばかり着ても面白くないと思わない?」

……主に、見る私が。

「だから、そっちは戻してきて、今度はお姉ちゃんと一緒に選ぶ?」

「うん、わかった。でも、そっちの商品は少し高いね……。ボク、今日はあまりお金を持ってきてないから少ししか買えないかな」

「心配しないで。お母さんからお金を預かって来てるから」

そう言ってお財布からお金を取り出してみせる。

「お父さんの今月分のおこづかいから……ね?」

「……あれ、本気だったんだ」

ちよっぴりあきれ顔の千広（でも、そんな顔も可愛らしい）と、再び店内を巡る。買い物を終えて外に出た時には、もう夕焼け空に

なっていた。

「ただいま。千広？ いるかい？」

「あ、父さん。おかえりなさい。どうしたの？」

普段はみんな揃って食べる夕食。だけど今日はお父さんの帰りが遅いので、他のみんなは先に夕食をとっていた。そして、みんなが食べ終わった頃によやくお父さんが帰ってきた。

……やけにテンションが高いのが気になるが。

「千広にプレゼントを買ってきたんだ。ほら、開けてごらん？」

そう言って、お父さんは千広に丁寧に包装された袋を渡す。

その中から取り出されたものは

「あ、これって……」

色とりどりの、下着の山。中には水玉や縞模様といった柄ものもある。

「千広、女の子になっちゃったろう？ だから、必要じゃないかと思っただけ」

なんか、おかしくない？ いや、間違っただけじゃないけど、なんだろう。このモヤモヤした感じ……。

「ありがとう。お父さん。すごく嬉しい」

そしてなんの疑念も持たない、純粋な千広。そんな千広の様子を見てしまっただけは、言うに言えない。

……あれ？ でも、ちょっと待って？

「ねえ、お父さん。サイズはどうしたの？ 適当に買ったの？」

とりあえずその件はおいといて、もうひとつ気になったことを聞いてみる。

「ああ、朝触った感じで、だいたいわかってたからね。八十四センチのCカップ前後だと思って、それくらいを買ってきたよ」

……あの時か。

あのシリアスな場面で、さりげなく確認……。ある意味尊敬するべきかもしれない。

「腰とかおしりは見た感じで判断したから、パンツの方はちょっと誤差があるかもしれないね。だからお風呂から上がったなら履いて見せ。痛っ、ま、待った母さん。僕はまだ、千広と話を」

「私がじっくり聞いてあげるから。だからこっちに……。ね。あ・な・た？」

ずるずると引きずられていくお父さん。それを見て少しだけすつとした。

……でも、まだまだ甘いと思う。

まだ数枚の紙幣が入ったお財布。実は、お父さんの来月分のおこづかい分まで入っている。さっきまではさすがにと思っていたけど……。もう、いいや。

明日は、千広の服を買いに行こうかな？

きっと楽しい一日になる。不思議とそう思えた。

第五話 弟姫

夕食を終えて洗いものを済ませた後、私たちは千広の部屋に集まっていた。理由としては、千広のブラを着ける練習のため。

「えっと、あれ？ はまらない……。どこにあるのかな？」

「ヒロ兄。ほら、ここだよっ」

「あっ、あった。ありがとう、舞」

「どういたしまして」

舞が千広の手をそつと導く。すると、ようやくホックが引っ掛かった。

「やっぱり、何も見ないで着けるのは難しいね」

「慣れればなんてことないんだけどね。でも、出来ないと困ることもあるから頑張つて、千広」

先程まではクローゼットの鏡を見ながら練習をしていた、その状態でならば問題ないくらいには上達している。だが、鏡を使わずになると、まだまだ苦戦するようだ。

ところで今、千広は一回毎に他のものと交換しながら何度もブラの装着の練習を繰り返していた。当然それには理由がある。

ひとつは様々な形状のホックに慣れるため。つまり純粋な練習としてだ。

そして、もうひとつは千広の好む材質のものを知るため。

ブラは直接肌に触れさせて身に付けるものなので、肌触りが良いものの方がストレスも少なくなる。

そう言った理由から交換しながらの練習を奨めた私（と舞）は「ほら、ヒロ兄。次はこれを試してみよう？」

「待って、舞。それよりもこっちの方が千広に似合うと思わない？」

「……えっと」

千広のプチファッションショーを楽しんでいた。

……眼福眼福。

コンコン

『千広？ いる？』

しばらくそんなことを続けていると、不意にドアを叩く音とお母さんの声が聞こえてきた。着替えの手を止め、千広がドアを開ける。

「何？ 母さん」

「お風呂沸いてるから、先に入ってきなさい？」

「うん、ありがとう。でも、姉さんや舞や母さんみたいな女の子が先に入った方がいいんじゃない？」

「うふふつ、それを言ったら、千広も女の子よ？ それに、深雪と舞にはちよつとお話があるから。……ねっ？」

「わかった。それなら、先に入るね？」

「ええ、行つてらっしゃい。あ、そのままの格好で行っちゃ駄目よ？」

そうお母さんに言われた千広は、上にシャツを着て部屋を後にした。そして、部屋に残っているのは私と舞と、ニコニコと笑顔を浮かべているお母さん。たぶん、千広に女の子と言われたことが嬉しかったんだと思う。

……いえいえ、いい歳してとか全然考えたりしてませんよー、お母様。だから、その全く笑ってない目でこっちを見ないでくださいませ。

「それで、話つて？ やっぱりヒロ兄のこと？」

「……ええ、そうよ」

なんとなく予想はできていた。さっきのやりとりも、当人である千広に聞かれないよう配慮してのことだろう。

ちなみに、先程のピンチは乗りきれた……と、思う。というか、乗りきれたと思いたい。

「正直なところ、あの子は今とても不安定だと思うの……。男の子でも、女の子でもない状態。あなたたちも今日一日と一緒に過ごして、何か思うところはなかったかしら？」

「……うん」

確かに、それはあった。私たちの“普通”という枠の中で考えれば、程度の差はあれど違和感を感じる光景。

例えば、平気でお父さんと一緒にお風呂に入ろうとしたこと。女の子なら普通は一緒に入ろうとはしない。

例えば、女性ものの下着に抵抗感を持たず、平然と着てみせたこと。男の子なら普通は嫌がつてみせる筈のこと。

さっきのブラ装着の練習の時もそうだった。

ひとりでブラを着けられるよう、何度も何度も繰り返していた。それは女の子としてなら普通だ。

その一方で、特に恥ずかしがることもなく（いくら私と舞が家族であり、女の子であったとしても）、上半身の一系纏わぬ姿を他人にみせている。これはきつと男の子の一面。

そう話してみせると、お母さんは「やっぱりね……」と言葉を漏らし、小さく溜め息を吐いた。

「これはあくまでお母さんの想像で、実際には違っている可能性も高いけど……。千広は自分がわからなくなってるんだと思うの」

「……えっ？」

「今まで男の子として生きてきたのに、急に女の子になってしまった。だから、確固たる自分というものを無くしてずっと悩んでる。

……故に、人に流されやすい」

お母さんが話してくれたこと。

曰く、千広は身体の変化に心がおいてけぼりにされた状態で、自分ではどうすればいいかわからなくなっている。だから、無意識に他人を支えにしまい、身を委ねてしまっているらしい。

考えてみれば今日一日、千広が断ったことはない。いや、一度だけ「学校をサボっちゃおうか？」と聞いた時は反対したけど、あれも私をもっと強く言っていたら渋々ながらも了承したかもしれない。

お母さんの話を聞き終わった後、舞がゆっくりと口を開いた。

「……それで、あたしやユキ姉はどうすればいいのかな？」

私も同じことを考えていた。私たちに何ができるのか。何をしてあげればいいのか……。

「それは」

『いつも通りに接してあげればいいのさ』

「えっ!？」

ドアの向こうから声が割り込んできた。いきなりの乱入に戸惑いつつ、ドアを開けてみると

「やあ、話は聞かせてもらってたよ？」

そこにいたのはお父さんだった。何故か、布団でグルグル巻きにされている状態だが……。

「あら？ 部屋に閉じ込めておいたのに……」

「うん、なかなか脱出には苦労したよ」

そう言って微笑んでみせるお父さん。なんだろう、すごく蹴りた

くなってきた……。

「というか、お父さんの部屋は一階でここは二階。ということは、あの階段（割と急）をそのイモムシの様な格好のまま登ってきたのだろうか？ ……よく登れたものだと思う。」

「二回程途中で滑って落ちてしまったけど、まあ問題ないよ。」

「しかも考えてること読まれた！？」

「それはいいけれど、説明してあげてくれる？ 私と同じ考えだと思っから」

「おっと、そうだね」

「今までとは違い、真面目な顔で話し始めるお父さん。……イモムシだけだ。」

「朝も言ったことなんだけど、僕は千広が男の子でも女の子でもいいと思ってる。ただ、千広が千広でいてくれればね……」

「だから……。と、お父さんは続ける。」

「千広が今までと同じでいられる様に、千広を千広そのままに受け止めてあげてほしいんだ。最も、身体が女の子である以上少し変わってしまうのは仕方ないけどね」

「やっぱりお父さんはすごいと思う。こんな時にでも取り乱さず、どうすれば良いかを冷静に考えてる。ただ」

「ということ、これをほどこれないかな？ 今ならまだ千広はお風呂にいる筈なんだ」

「これさえなければいいのに……。」

「……あなた？ 仏の顔も三度までって言葉。知ってる？」

「ちよつと待った、まだ三度目だからセーフじゃないかい！？」

「銀行の預金残高」

「……………」

「ああ、お父さんが買ってきたたくさんのお金でそこから出てたのか……。」

ガラッ

ポイツ

「ノオオオオオオオオオオオオ!!」

ドサツ

ピシャツ

「さてと……」

お父さんを窓から外に捨てて、何事もなかったように話し始めるお母さん。ちよつと怖い。

「まあ、そういうわけなんだけど……。ただ、さっきも言ったように、今の千広はとても危ない状態。純真無垢なお姫様みたいなものかしらね？」

「……お姫様」

「だからね？ そんな千広に近付いてかどわかすクソ虫共は徹底的に排除すること。……いいわね？」

「「ラ、ラジャー」」

本能が警告する。この人（お母さん）には逆らうなと……。でも

お姫様。

その単語を思い浮かべる度に、不思議と胸が熱くなっていく。

千広はお姫様。お姫様な私の弟。

私の、弟姫……
おとうとひめ

「お風呂、上がったよ？ ……あれ？ どうしたの？」

お風呂から上がって、戻ってきた千広。頬がほんのりと赤みがかっている。

「うっん、なんでもないよ。ただ、千広のこと大好きだよって話してただけ」

「えっ……。あ、ありがとう。ボクもみんなのこと、大好きだよ」

さっきよりも少し赤みが増した気がする。照れているのかな？

とても可愛らしいね……。

可愛い可愛いお姫様。私があなたをお守りします。だから

ずっと、私と一緒にいてくれませんか？

第五話 弟姫（後書き）

こんにちは、赤井 鈴です。

今回はなんだかコメディーよりもシリアスが強く出てしまっている気がします。一応、お父さんで中和したつもりではいるのですが、いかがでしょうか？

次からはまたコメディー色の強めな話を書けると思いますので、そちらの方が好みの方がおられましたら、今しばらくお待ち下さいませm(_____)m

第六話 男の子と女の子

千広が女の子になって二日目。今日は隣街まで千広の新しい制服を取りに行くことになっている。

実は、昨日私たちが帰ってすぐにお母さんが千広の身体を計って、電話で注文をしていたのだ。

電話口でお母さんが「明日の昼までに間に合わなかったら、おたくの」とか言ってたのが聞こえてたけど……。

うん。怖いからもう考えないようにしよう。

「姉さん、お待たせ」

着替えた千広が二階から降りてきた。私の春物のワンピースを貸してあげただけで、とてもよく似合っている。

「お待たせ」

そして、我が家の末の子の優も一緒にやってきた。今日はこの三人で出かけるのだ。

ちなみに、舞は所属している水泳部の練習で学校に行っているの
で今回はいない。

「それじゃお母さん、行ってきます」

「はい。みんな、気を付けてね？」

「うん、行ってくるね」

「行ってきます」

そうお母さんと言葉を交した後、私たちは家を出発した。目指すは、電車に乗る最寄り駅。

「そういえば昨日の、確か……岡崎さんだったかな？ そっちはいいの？」

昨日、優にかかってきた電話のことを一応聞いておく。声の大きい子で、こちらまで話の内容が聞こえてきたのだが、『明日のデー

ト、楽しみにしてる』と言っていた筈だ。が

「……向こうが勝手に言ってるだけ。それに、断わろうにもその前に切られたから」

まあ、予想通りの回答だった。だって、いつものことだから。

自分で言うのもなんだけど、私を含め兄弟みんな結構もてる。私自身、告白も何度かされた。全部断わってるけど……。

でも、その中でも特にもてるのが優。この子だけは本当にすごい。去年のバレンタインデーなんかチョコレートを七十個近くも貰ってきた。

……本当にキミは、小学二年生（当時）だったんだよね？

みんなで頑張って食べて、体重が二キロ増えたこと（今はもう戻したけど）。千広と優が、二人で涙を浮かべながら夜遅くまでお返しを作っていたこと。

……あの出来事を、私は生涯忘れないだろう。

その後、私たちは取り留めのない話をしながら歩き、二十分程かかって駅に到着した。

「いらつしやいませー。お客様、何名様でございますか？」

隣街に着いた後、私たちはさっそく制服取り扱い店を訪れた。

無事、千広の制服を受けとることができてよかったと思う。……本当によかった。

そして、その帰り。お昼時とあって少しお腹が空いてきたので、

このファミリーストランでお昼を取ることにしたのだ。

「ご注文がお決まりになれましたら、そちらのベルでお呼びください」

私たちを席に案内し、マニュアル通りのセリフを残して、店員さんは去っていく。

「私はクリームパスタにしようかな？」

「僕はチキンドリアで」

お子様ランチじゃないのか。

「……深雪姉ちゃん、ガキ扱いはやめて」

「あ、ごめん」

……なんだか最近ずっと考えてることを読まれてる気がする。そんなにわかりやすいのかな？

「うーん……」

一方、千広はまだメニュー表を見て頭を悩ませている。いつもはすぐに決める方なのに……。やっぱり女の子化が関係しているのかもしれない。

「ねえ、兄ちゃん」

「えっ？」

「兄ちゃんが食べたいものでいいんだよ？ 昨日も言ったよね？」

千広兄ちゃんがいつて……」

「あっ……。うん、そうだね。ありがとう、優。それじゃあ呼ぶね？」

ん？ イマイチよくわからない。食べたいものを選ぶのは普通のことじゃないのかな？ というか、昨日って？

「ねえ、ゆ」

「お待たせしました。ご注文をどうぞ」

……遮られた。

「このクリームパスタと、チキンドリアと」

「以上ですね？ お冷やは前の方にありますので、ご自由にお取りください」

千広が注文を伝え、店員さんがそれに答える。その後、千広は「お冷や取ってくるね」と席を外した。

……今度こそ。

「ねえ、優？ さっきのつてどういう意味？」

「ん？ そのまんまの意味だよ？」

それがわからないんだけど……。

「もう少し詳しく説明できない？」

「えっと、つまり兄ちゃんは、男の子ならとか女の子ならとか考えて選んでたんだよ。だから、そんなの関係なく、兄ちゃんの好きなのを頼めばいいって」

それで……か。

「昨日つていうのは？」

「昨日、一緒にお風呂に入っている時に、兄ちゃんに『優（僕）から見て、ボク（兄ちゃん）は男の子と女の子のどっちだと思っ？』って聞かれたんだ」

一緒にお風呂？ なんとという抜け駆け。正直甘く見ていた。

……でも今は先の話を聞こう。お風呂の件は家でじっくり問いつめる。

「……優はなんて答えたの？」

「わからないって答えた。でも」

「でも？」

「男の子でも女の子でも、中身が千広兄ちゃんならどっちでもいいと思っつて言っただよ」

「……そっか」

こどもらしい素直な答えだ。でも、おそらく千広が一番欲しかったと思われる答え。

その答えを自然に導き出した優に、私は少しだけ嫉妬した……。

「兄ちゃん……」

「千広、これ……」

三つのお冷やを持って戻ってきた千広を交え、しばらく談笑していた時のこと。私たちのテーブルに運ばれてきたのはクリームパス
タとチキンドリアと

「スーパードラックスパフェ。重さ二キロだって」

巨大な器に盛られたクリームの山。山。山。加えて、綺麗に切り
揃えられたフルーツが大量に乗り、チョコソースもたっぷりかけら
れている。

見ているだけでお腹が膨れてきた気がする。

「男の時はちよつと恥ずかしかったから……。それに、ひとつ試し
たいことがあつたしね。それじゃあ食べよう？」

「うん……」

「そう……だね」

「いただきます」

そう言つて幸せそうにパフェを食べる千広と

「……いただきます」

細々と食べる私たちは対称的だったことだろう。

二十分後

「うう……、もう食べれない……」

四分の三程食べたものの、途中で限界を迎えた千広。いや、それ

でもよく頑張ったと思うけど……。

残ってしまった分は私と優で少しずつ減らしていき、なんとか食べ終えた。

「でも、ひとつわかったよ。女の子の身体になってもボクはボクなんだね。普通サイズ一杯分くらい食べたら、気持ち悪くなってきた

……」

「「……………」」

……いや、女の子ならみんな甘いもの好きだったり、いくらでも食べれたりってことはないからね？

でも、苦しそうでありながらも、なんだか満足そうな千広を見ると、間違ってると言えなくなってしまう私は駄目な姉なのだろうか？ ……きっと違う筈だ。

「……………あの、このスプーン貰って帰れませんか？」

「えっ、いや。それはちよつと……………」

「お願いしますっ！！」

「……………ちよつと店長に聞いてみますね」

……………ふふっ。千広と間接キス記念。

「……………深雪姉ちゃん」

ギクッ。

第七話 決戦前夜

「羊が三千二百四十二匹。羊が三千二百四十三匹……」

私は今、眠れない夜を過ごしている。理由は、横で寝ている千広が気になって。当人はすーすーと規則正しい寝息をたてて、気持ちよさそうに眠っている。その寝顔はまるで天使のようだ。

……まあ、実物は見たことないんだけどね。

それに、仮に本当に天使いたとしても千広の方が可愛いのではないか？　と思う。我ながら少々姉バカかもしれない。

「羊が三千二百四十四匹。羊が三千二百四十五匹」

もちろん、こんな状況になったのにはわけがある。それは、今日のことと明日のこと……。

ファミレスから出た私たちはそのまま街へと繰り出し、色々な場所を見て回った。ファンシーショップで小物を見たり、ペットショップで動物と触れ合ったり……。ゲームセンターに寄って、プリクラを撮ったりした。

優にお願いして一枚だけ千広とのツーショットを撮らせてもらったりもした。「貸しひとつだよ？」と楽しげに言っていたのが妙に気になるけど……。

まあ、それは置いておくとして楽しい時間を過ごしていたのだ。

……最初のうちは。

少しずつ時間が過ぎてゆくにつれ、千広の笑顔も失われていった。昨日と同じように夕日で空がオレンジ色に染まり出した頃。その時にはもう自分から話しかけることもなくなっていた。

家に帰り着いてからもそれは同じ……。いや、さらに悪化している状態。

お父さん、お母さん、舞、優、スズ。そして……。私。誰にもどうすることも出来ないまま、今日が終わりを迎えていく。そんな一日だった。

「千広？ まだ起きてる？」

まもなく夜の十一時になろうといった時間帯。私は千広のことが気になって部屋を訪れた。お父さんからは「少しひとりで考える時間をあげよう」と言われていたけれど……。

「姉さん？ ……うん、まだ起きてるよ」

声が返ってきた。千広は……。いや、千広に限らず私の家族はみんな夜の十時半には就寝するので珍しいことだと思う。

でも、今日だけはきつと起きてると思った。

「入るね？」

そつとドアに手をかけ、ゆつくりと開ける。一応、他のみんなにも配慮。

「どうしたの？ こんな夜中に珍しいね？」

「ちょっと……。ね。千広、今日は少し様子が変だったから気になつて」

「……ごめんなさい。心配かけちゃったね」

少しだけ苦笑いしてみせる千広。でも、その無理矢理感が痛々しい。

「ううん。……ねえ、横に行ってもいい？」

「……うん」

千広の部屋にある椅子は勉強机のものだけ。なので、それ以外の時はベッドに座ってということが多い。今回もそう。

私はそつと千広の隣に腰かける。

「今考えてるのって、明日のことでしょう？」

「……わかるの？」

「さっきからずっと机の上の紙袋を見てるんだもん。わかつちゃうよ……」

千広が見ている紙袋。それには私も見覚えがあった。中身は今日取りに行ったばかりの制服。女の子の着る制服……。

それを着ていくことは、女の子だと周りに告げることに他ならない。

「どうしても考えてしまっただ……」

そつ、ポツリと

「みんながボクをどう思うのになって」

千広は言葉を漏らす。

今まで男の子として一緒に過ごしてきた人物が、ある日を境に女の子として自分の前に現れる。たぶん、平静でいるのは難しい。

「だから、明日になるのが怖くて、今も眠れなかった……」

「……そっだね」

どんなに望まなくても、明日は必ずやってくるものだから。それが千広を追い詰めていた原因。

それなら、私が千広にしてあげられることって何があるんだろう？
千広の不安を取り除いてあげられないのかな？

今の私に出来ることは

「姉さん？」

そつと、私と千広の手を重ねる。ほどけないように指を絡めて。

「今日はここで一緒に寝よう？」

「えっ？」

「ほらほら、布団に入つて。電気消すよ？」

有無を言わず一緒に布団を被り、電気を消す。急に暗くなったため、まだ目も慣れておらず何も見えない。

ただ、繋いだ手の温もりが隣に千広がいることを教えてくれていた。

「前はよくこうやって一緒に寝てたよね……。覚えてる？」

「……うん、覚えてるよ。姉さんもボクも、嫌なことがあった日はお互いの部屋を訪れてたね」

「雷が鳴っていた日。怖い夢をみた日。友達と喧嘩した日……。他にはどんなことがあったかな？」

そんな日は決まって一緒だった。ひとりぼっちじゃないんだって、幼心なりにわかってたんだろう。二人だと、不安な気持ちが嘘のように溶けてなくなってしまつて、安心できた。

いつの頃からかやらなくなつてしまつたけれど……。それでも

「……私はいつでも千広の味方だよ？ 明日も、明後日も、その先もずっと」

この気持ちだけは、今でも変わらない。

「だから、ね？ 今日はもう休もう？」

「うん、そうするね。……ありがとう、姉さん」

よかった。ようやく、笑ってくれたね……。

結構目も慣れてきたとはいえ、闇に包まれた部屋の中はまだまだ暗い。だから、正直なところ千広が本当に笑ってくれたところかは

つきり見えたわけではないんだけど……。

「お休みなさい、姉さん……」

「うん、お休み……」

でも、私の長年培ってきた姉としての経験と勘が「間違いないよ」
って教えてくれている。きっとこれは、私と千広の絆……。

「お姉ちゃん……」

不意に、横で寝ている千広の口から私を呼ぶ声が漏れる。

「どうしたの？ 千広」

そう聞き返してしばらく待つてみる。でも、なかなか反応がない。
どうやら寝言だったみたい。

あの後、千広はすぐに眠りについた。きっと一日中気を張って
て消耗してたんだと思う。……ごめんね、もっと早く気付いてあげ
れなくて。

でも

「お姉ちゃん……か」

久しぶりにそう呼ばれた気がする。

今は私のことを「姉さん」と呼ぶ千広も、小学生の頃は「お姉
ちゃん」と呼んでくれていた。

……そっか、千広と一緒に寝なくなったのもあれくらいの時期だ
ったな。

横で眠る千広をもう一度そつと見やる。あの頃から変わらない、
可愛らしい寝顔。

今日は、少しだけお姉ちゃんらしいことができたかな？

明日の決戦の舞台をしっかりと見守れるよう、私もそろそろ休む
としよう。

明日も、明後日も、これからも。千広が笑顔で過ごせるように…
…。

お休みなさい、お姫様……。明日は頑張ろうね。

そっと、私は目を閉じた……。

……

……

……

ところで、今何匹まで数えてたっけ？

第七話 決戦前夜（後書き）

なんだか前の話からずいぶんと間があいてしまいました……。

私はどうも登場人物が少ない＆動きが少ない話を書くのは苦手なようです（泣）

ところで、私の予定としては後二話くらいで導入部が終わり、それから日常系のコメディーを書いていく手筈になっています。

次の話は気分転換もとい現実逃避をして先の話を書いてみたりせずに、早めに書いて載せれるようにしたいと思いますので、また足を運んでいただけたら嬉しいです。

第八話 また一緒に…… 前編（前書き）

今回の話と次の話は前編後編の続きものです。

第八話 また一緒に…… 前編

「しかし、今日はどうなってるんかねー？」

昼休みになり、私と春香、理奈の三人で集まってお昼をとっていた時のこと。私の向かいに座った春香がパンをかじりながら話しかけてきた。

「うん、こんなこと初めてだよ？ 何があつたのかな？」

理奈は一度箸を休め、春香の言葉に同意する。

二人が……いや、おそらく学校のみんなが思っているであろう疑問。それはどうして急に午前中の授業が全て自習になってしまったのか……。

「まあ、あたしとしては助かったけどなー。おかげでぐっすり眠れたよ」

「もう、春香ちゃんだったら……。ちゃんと自習しないと駄目だよ」

「いや、昨日は夜中の二時までゲームしててさ。眠くて起きてられなかったんだよね」

そんなことを話してみせる。自習になった理由を知らなければ、私もその会話の中に混ざって「もつと早く寝なさいよ……」とか言っ一緒に笑ったりしていたと思える。けど

「ん？ どうした深雪。なんか顔色が悪いぞ？」

「深雪ちゃん、具合が悪いの？ 保健室に行く？」

「うつん、平気。……ありがとう」

それが千広のことだと知っている私は、どうしてもそのことが頭から離れず、自ら会話に入ろうという気が起こらない……。

今朝、お母さんは私と千広を学校まで車で送ってくれた後のこと。千広は私と別れて一人で職員室に向かった。

本当は私も一緒に行くつもりだった。でも、千広は「一人で大丈夫

夫だよ」と笑ってみせた。

無理矢理につくったものではない、純粹な笑顔。そんな顔をされて、私はそれ以上何も言えなかった。

ガラッ

「あー、そのまま昼食を続けながらでいいから聞いてくれ」

突然、教室のドアが開かれ先生が入ってきた。クラス委員に自習という言付けに加え、朝のHRも任せて緊急の職員会議に出ているので今日に限っては顔を見たのは初めて。

「四限目の時間は臨時の全校集会になった。なんで、時間になったら速やかに体育館に集合してくれ。以上だ……」

それだけ伝えて、先生は再び教室を後にした。一瞬静まりかえった教室は、再び賑わいを取り戻す。

「臨時集会かー。数学が潰れるのはいいけど、ホント何があったのかね？」

「わからないけど、結構重大なことなんだろうね。午前中の授業が全部潰れちゃうくらいだもん」

「まあ、行ってみればわかることか……。深雪、早く食べないと昼休みが終わるぞ？」

「……うん」

運命の時間までは、あと少しだった……。

体育館に着くと、そこはもう他のクラスの生徒たちで溢れかえっていた。時間もまもなく四限目に入ろうとしているところからして、どうやら私たちは最後の方のようだ。各先生方が生徒たちを指定の場所に並ばせて座らせている。

「ほら、そろそろ時間だから早く並んで座れ。揃ったところで校長先生の話が始まるからな」

うちのクラスにも同様に指示が出される。でも、早く始まってほしいと思う反面、いつまでも始まらないでとも思う……。どちらがいいのか、私にはわからなかった。

『じゃあ校長先生、お願いします』

『ああ……』

数分後にようやく最後のクラスが並び終え座ったのと同時に、壇上に校長先生の姿が現れる。その顔はなんだか疲れているようにも見えた。

『えー、本日皆さんに集まってもらったのは』

開口一言目はそんな定型文な挨拶から。それからも特に意味もない煮えきらない言葉が続き、周りはさっそくダレてきている。

何をやってるんだこの人は……。

校長先生のはつきりとした物言いに、苛立ちがつのってくる。

『なにぶん私にもこのような経験はなく前例としても聞いたことがないことでいかに扱っていいのかわからない次第なのですが。』

……とりあえず出てきてもらっていいかな？』

……えっ！？ まさかここで！？

猛烈に、嫌な予感がした……。

『ん？ ……おい、あれって』

『速水……か？　なんで女子の制服着てるんだ？』

『うそ！？　別人じゃないの！？』

『でも今日あいつ来てなかったし……』

舞台袖から現れた千広の姿を認め、ざわめく生徒たち。そのうちの一部、おそらく千広のクラスメイトたちと思われる集団から聞こえてくるのは取り分け大きな動揺の声。

『実はここにいる速水君ですが、なぜか急に身体が女性化してしまったという話でありまして』

なっ！？

一部だったざわめきが、体育館全体に飛び火する。先生たちが必死で対応するが静まる気配はない。

『うそだろ……？』

『女性化ってどういうことだ！？　女装とか、元々女だったとかじゃないくて！？』

『あの胸とかも本物ってことなの？』

『パンツは？　……くそっ、見えねえ』

あのハゲエエエ……。

今は最悪のタイミングではないか。これでは千広が晒しものだ。数百もの好奇の視線に晒されている千広。きっと辛い思いをしている筈だ。

できることなら隣にいてあげたい。側に立って、守ってあげたい。

……あれ？

でも、それなら何で私はまだここにいるの？

どうして千広の隣に立っていないの？

どうして周りの視線を遮って千広を守ってあげていないの？

どうしてあのか細い身体を抱き締めてあげられないの？

ねえ、どうして……？

「おい、深雪！！」

「深雪ちゃん！？」

私を呼ぶ、幼馴染みたちの声。その声を振り切り、私は走り出す。壇上にいる千広の元を目指して。

途中、私を止めようとした先生もいたけどそれかわして走り続ける。そして

「姉さん……？」

壇上に駆け上がった私。驚いたような顔でこちらを見ている千広。ようやく辿り着いた。

壇上から今まで私がいた下の方を見ると、こちらを見ている生徒たちと目があう。正直、あまり気分のいいものじゃない。

だから、早く終わらせよう。早く終わらせて、千広をこの場所から連れだしてあげよう。

そう思って、私はマイクの前に立つ

「待って、姉さん」

筈だった。

私を止めたのは、今まさに私が守ろうとしていた人物。私の大切

な弟の、千広……。

「お願い、姉さん。ボクにやらせて？」

「……えっ!？」

私の驚きをよそに、千広は続けた。

「正直、このまま姉さんに任せてしまいたいって気持ちもあるよ。でも」

一度言葉を区切って、再び生徒たちの方を見て千広は

「みんなにボクの気持ちを伝えたい。そのためには、ボクが自分でやらないと駄目だと思うから……」

先程、下から見えた不安を無理矢理抑えているかのような様子は私の見間違いだっただろうか？

さつきは、このままでは千広が傷付いてしまうかもしれない……。だから、代わってあげたいと思った。でも

今の私の目に映る人物。それは、目に強い意思を宿した、ひとりの勇敢な少女だった。

「だから、ね？ 姉さんにはそこで見ていてほしいんだ……」

「大丈夫だよ」とでも言っているかのように、私にそっと笑いかける。とても綺麗な笑顔。私の大好きな千広の笑顔。

「……うん」

……ずるいな。そんな顔でお願いされたら、断れないよ。

「ありがとう、行ってきます。姉さん」

「……うん。行ってらっしゃい」

自然と口も動いてしまう。いつになっても千広には勝てないみたい。……ちよっぴり悔しいな。

でも

「……あれ？ どうしたんだろう。涙が出て……!？」

今の勝負だけは負けてはいけなかった。何故か、そんな気がした……。

第九話 また一緒に…… 後編

『こんにちは』

千広の、たつたその一言。それだけで今まで喧騒に包まれていた体育館という場所は、まるで外部と隔離されたかのように音を失った。

『先程、校長先生から紹介がありました、速水千広です』

千広の澄みきった声が体育館に響きわたる。

誰ひとり声を出さない。いや、出すことが出来ないのかもしれない。

『実はボク自身、どうしてこんなことになってしまったのかさっぱりわかりません。この前の、土曜日の朝。目が覚めたらもうこの身体になっ……。まだ夢でも見てるのかな？ なんて』

みんな、千広の姿に目を奪われ、千広の声に耳を奪われる……。

『結局のところ、夢なんかじゃなくて現実だったみたいなのですが……』

そう、その光景はまるで

『それでも優しい家族に支えられて、手探りではありながらもなんとかやれているといった感じです』

お姫様の舞台……。

『ところで、皆さんはこの学校のことはどう思いますか？』

空気がほんの少しだけ変わった……。千広が本当に伝えたいこと。それはきつとここから……。

『まだ入学して一月も経っていませんが、それでもボクはこの学校が好きです……。友達になれたクラスメイトのみんな、厳しくも本当は生徒思いの先生方』

飾り気のない言葉。でも、千広の素直な気持ち。

『そして、大好きな姉さんのいるこの学校が……好きです』
だから、こんなにも心に響いてくるんだと思う……。
『だから』

一度言葉を切って会場全体に目を向ける千広。一人ひとりと向き合うかのように。そして

『もう一度この場所で、ボクと一緒に過ごしてくれませんか……？』
とても小さな願いを言葉に乗せて飛ばした。

静寂に包まれた体育館。五秒、十秒、二十秒、三十秒……。完全な沈黙が場を支配していた。

パチ……パチ……

そんな折りに、その場を切り裂く小さな音。この広い体育館の、たった一ヶ所からだけ聞こえてくる本当に小さな音。

春香……。理奈……。

私の幼馴染みで、親友の二人。理奈は優しい表情を浮かべて、春香はやれやれとちよっぴり苦笑気味に手を叩いてくれている。

ん？……あー。

不意に目があった春香から「何で黙ってた？」といった感じの視線が飛んできた。これは後が大変かもしれない……。

パチ……パチ……

別の場所からも手を叩く音が聞こえ始める。
何人かは見覚えがあった。千広のクラスメイトの子たち。

パチパチ……パチパチ……

手を叩く人の数が増えていくにつれ、音は段々と大きくなる。やがて

パチパチパチパチパチ……

この体育館にいる全員が手を叩いて、千広に拍手を送ってくれるようになった。それはつまり、みんなが千広を受け入れてくれたということ……。

『速水ー！』

『俺も好きだあー！！』

『千広くん！』

『結婚してくれー！！』

みんなの気持ち私が私の方まで伝わってくる。

『ありがとう……ございます』

千広も言葉を返す。本当に、嬉しそう……。

よかった。本当によかった……。千広がみんなに受け入れてもらえて。

……よかった、筈なのに

「姉さん、どうしたの？ 大丈夫？」

「……うん、大丈夫……だよ」

どうして私はこんなに悲しい気持ちになっているのだろうか？
どうしてこんなに心が痛いのだろうか？

「校長先生、後はお願いします。……ほら、姉さん。行こう？」

涙が、止まらない。

「……落ち着いた？」

「……うん。ごめんね、千広」

ここは体育館にある控室。そして、ここにいるのは私と千広の二人だけ。

あの後、私は千広に抱きついて泣き続けた。そして、そうしているうちにやっとわかった。どうして素直に喜ぶことが出来なかったのか……。

私の手の届かない遠いところへ、千広が行ってしまったような。そんな気がしたから……。

今日一日の千広の様子を思い返す。

「一人で大丈夫だよ」

「ボクにやらせて？」

「そこで見ていてほしいんだ」

「行ってきます。姉さん」

私に頼ることなく、自分でやるという意味が込められた言葉。

そして、先程みんなを前にした時の堂々とした姿……。

その時々を思い出す度に胸が締め付けられる。本当は千広の成長を喜ぶべきところなのに……。

千広が私の手を必要としなくなることに。今、伝わってきているこの温もりが、いつかは手に入らなくなってしまうこと……。

そのことに、気付かされてしまった。

想像するだけで、胸が苦しくなる……。

「姉さん？」

そつと千広から身体を離す。なんだか、とても寒くなった気がする……。

「ありがとう、もう大丈夫だから……」

いつか、千広が私から離れていってしまう日が来るのだろう。そうなった時には、この温度が当たり前になるのかな……？

それならば、いつそのこと

「でも、よかったね。みんなに受け入れてもらえて……」

「うん」

私の方から離れてしまおうか。そうすれば傷は軽くて済む筈だから……。

最初のうちはとても辛いと思うけれど、千広のためにもその方がいいのかもしれない。

千広にはみんながいる。だから、私ひとりがいなくなってもきつと……。

「これで、また二人で一緒に通えるね」

「……えっ!？」

「これからもよろしくね、姉さん」

「あっ……」

そう言っ、千広は自分の手で私の手をそつと包み込む。それは、とてもとても温かくて……。

「大好きだよ」

……どうして。

「お姉ちゃん……」

どうしてこの子はこの子にも……。

「……っ。ね、姉さん? どうしてまた泣いてるの!？」

「……え?」

知らないうちに、また涙が溢れてしまったらしい。でも、さっきまでとは違う種類のもの。

嬉しい時も涙が出るというのは本当みたいだ。

「……千広が、意地悪だから……だよ？」

「ええっ！？ ボク何かしたっけ！？」

思いがけない私の言葉に慌てふためく千広。でも、嘘じゃないよ……？

無理して、我慢して、諦めて決めた筈の私の決心。それを千広はたったの一言で揺るがして、二言で崩壊させて、三言目では粉々にしたのだから……。

もう、元に戻すことは出来ない。

そんな意地悪な千広には仕返しをしないと……だよね？

千広がもう嫌だと言ってても、許してあげない。私の気が済むまでは絶対に離れてあげないし、逃がしてもあげない……。

だから

「覚悟してね？ 千広……」

第九話 また一緒に…… 後編（後書き）

こんにちは、赤井 鈴です。

今回でようやく導入部の山場を越えることが出来ました。シリアスな話は苦手な方なので執筆に時間がかかってしまうのが難ですね……。

それでも今回の話があってこそその今後の展開があるので、避けて通ることも出来ず大変でしたが、これようやく自由に話を書いていけると思うと嬉しいです。（と言っても後一話＋は固定なのですが……）

それ以降は深雪たちの折りなすちよつとズレた日常をノンビリと描いていく予定です。なのでお時間が許されました時、また深雪たちにお付き合いいただけたら幸いです。

第十話 速水家の普通

「……はあ」

最近、なんだかよく溜め息を吐いているような気がする。今日一日でも、もう何度したのかすら覚えていない。

溜め息を吐くと幸せが逃げるとよく言われるけれど、自然と出るものは仕方がないと思う。

「……はあ」

ああ、また……。

私がこうして思い悩んでいること。それは言うまでもなく千広のこと……。

近頃は学校も段々忙しくなってきた、私とあの子の時間が噛み合わないこともしばしば。今日も『明日の授業の調べものがあるから図書館に寄ってくる』とのメールがさつき届いた。

それでも一緒にいたくて『手伝おうか?』と返信をしたけれど、『班ごとのグループ研究だから』『結構時間がかかりそうだから先に帰ってて』と返ってきた。

そんなこんなで、最近はなかなか一緒に時間をつくることが出来ていない（家では一緒にいるけれど、あのくらいでは全然足りない）。平たく言ってしまうと

千広分が完全に不足してしまっていた……。

去年と比べれば遥かに良くなつた。私は高校で、千広は中学校。あの時は休日を除けば、家か通学路の途中までしか一緒にいれなくて本当に寂しかった。

それでも、人は一度上の生活をしてしまつとなかなか元の生活に

は戻れないものなのか。あの三日間を過ごした後だとなんだか物足りないという感じだ。

せめて、私と千広が同じ学年、同じクラスとかだったならもつと一緒にいられると思うのだけど……。

……

……

……

あれ？ これってもしかして名案じゃない？

試しにちょっとだけ想像してみよう。

『ねえ、姉さん』

『ん？ どうしたの？』

『もうどの役員になるのか決めてる？』

『うつん、まだだよ。千広は？』

『ボクもまだ決めてないんだけど。……姉さんさえよければ、一緒に図書委員をやらない？』

『えっ？』

『いや、別に図書委員じゃなくてもいいんだけどね。保険委員とか美化委員とかでも。ただ、姉さんと一緒にやりたいなって……』
『……うん、いいよ』

……いい。

『あ、しまった……』

『どうしたの？ 千広』

『うん、実は数学の教科書を持ってくるの、忘れちゃったみたいで

……』

『そうなんだ……。じゃあ、私の教科書を一緒に使おう？』

『えっ？』

『ほらほらっ、机くつつけて？』

『……うん、ありがとう姉さん』

『どういたしまして』

『……姉さん、ちょっといい？』

『うん、いいよ？』

『この問題がなかなか解けなくて……』

『ああ、これは昨日習ったこの公式に当てはめるとXの値がでるでしょう？』

『あっ、そうか』

『後はもう一度自分で考えてみて？ またわからなくなったら教えてあげるから』

『うん。ありがとう、姉さん』

とてもいい。

『はい、千広。あーん』

『ね、姉さん。恥ずかしいよ……』

『いいじゃない。ねっ？ ほら、あーん』

『あ、あーん』

『どう？ 美味しい？』

『……うん、美味しい』

『よかった』

『……はい、あーん』

『ふえっ？』

『ボクだけ恥ずかしいのはずるいよ……。だから、姉さんにもお返し』

『わ、わかった……。あ、あーん』

『美味しい？』

『……うん。とても、美味しいよ……』

すごく、いい。

とっても甘い学校生活になりそうな予感。何だか無敵の未来が見えてきた気がする。

「い」

他にも千広と一緒に文化祭で店をやったり、千広と一緒に修学旅行に行ったりとかして

「おい、速水。聞こえてないのか？」

「ひゃうっ！？」

「うおっ！？」

と、背後からそんな幸せな想像にメスを入れる声が聞こえた。

「あー、すまん。驚かせるつもりはなかったんだが、速水が廊下のと真ん中で固まってるのが見えたもんで……」

「……いえ、ありがとうございます」

その声の主は高橋先生。一年生の頃からの私のクラスの担任の先生。

「……ん？　ということはつまり……」。

「まあ、とりあえずそれだけだな。あまり遅くならないうちに帰れよ？」

「あの、待って下さい」

「ん？　どうした？」

「先生に、大事なお話があります」

「ここならいいか？」

「はい、あまり他の人には聞かれたくない話なので……」

ここは生徒相談室。基本的に先生と生徒が一对一で話をする事が出来る部屋。込み入った話をして外に漏れることがないように防音にも気をつかって造られている。

「それで、話というのは？　こんなところでないと話せないということは、深刻な話なんだろう？」

「はい」

そう、深刻な話。私と千広の未来がかかっているのだから。

「先生にはご迷惑な話だと思います」

さすがに面倒はかかってしまう筈だ。それには少しだけ申し訳なく思う。

「でも、先生には私の気持ちを知っておいてもらいたくて……」

「ふむふむ……。ん？　ちょっと待て。それはもしかしてアレ関連か？」

アレとは何だろう？　思い当たるふしは

……。ああ、そうか。一週間前の集会のことだ。

考えてみれば私の相談なんて千広のことだと。そして、勘のいい人なら私が何を考えているのかさえも、すぐにわかるのかもしれない。……でも、それなら話が早い。

「はい、アレです」

そう答えると先生は苦い顔をする。

「……それは気の迷いだ。早まるな」

「気の迷いなんかじゃありません。私は本気です」

勝手に決めつけないでほしい……。

「第一、俺には妻も子どももいる。それはお前も知っているだろう？」

どうして先生の奥さんや子どもの話が出てくるんだろう？　いや、そうか……。私に協力すれば先生の立場が悪くなるのかもしれない。家庭を持つてゐる先生には頷き難い話なんだ……。でも

「はい、知っています。……でも、退くわけにはいきません」

「速水……」

私にも退けない理由があるから。

「だから先生、お願いします。私の気持ちを受け止めて下さい」

「むう……。だが、それでも」

「私を留年させて、千広と同じクラスに編入させて下さい」

「俺にはあいつらを裏切るなんてことは……。……何？」

あれ？　何だか変な顔してる？

「ですから、私にもう一度千広と一緒に一年生をやらせてほしいんです」

「……………あー、すまん。盛大に勘違いしてたわ」

……………何とだろうか？

「まあ、とりあえず俺から一言言わせてもらつとすれば、それは無理だ。お前を留年させる理由がない」

「そんな……」

「じゃあ、お前から何かあげてみるか？」

「そう、ですね……。出席日数が足りないとか」

「お前、去年皆勤賞貰つてただろう……」

「じゃあ、成績不十分ではどうですか？」

「お前が成績不十分だったら、今の二年は一桁も残らないぞ？ 前回のテストなんか、たしか総合で七位だった筈だが」

「それは……、カンニングをしたから……とか」

「一番前の席でか？ ……それに、俺の英語の最後の自由作文。文法まで完璧に、『私の家族』という内容で裏までぎっしり書いてたのは誰だったかな？ ……八割がた弟のことについて書かれていたが」

しまった、あれは罠だったのか……。

「……そうだ。実は私、留年しないと死んでしまう病なんです」

「そうだ。じゃないだろ……。とりあえず、医師の診断書を先に持つてこい」

うう……。手強い。このままでは私と千広のラブラブ姉弟計画……。いや、今は千広は女の子だからラブラブ姉妹計画かな？ が潰れてしまふ。何でもいい。他に何か理由はないものか……。

「それじゃあ」

「何やってるの？ 姉さん……」

「……え？」

先生と私の二人しかいない筈の部屋に響く、もうひとつの声。そ

れは

「千広……」

今の話の鍵だった人物。私の弟の、千広。でも、どうして？ この部屋は確か

……あつ。窓、全開になつてゐる……。

「もう、先生を困らせちゃ駄目じゃない」

「だって……」

千広とのラブラブな学校生活がかかっているんだもん……。

「高橋先生。姉さんが変なことを言つて、すみませんでした……」

「いや、気にするな。速水のブラコ……弟思いを知ることが出来て、なかなか面白……こほん。有意義な時間だった」

なんだか、失礼なものを感じるのは気のせい？

「そう言っていたけると助かります……。それじゃあ、ボクたちはこれで失礼しますね」

「ああ……。二人とも、気を付けて帰れよ？」

「あつ、待つて……」

まだ話についてな

「ほら、姉さん。早く行こう？」

「あ、うん……」

……我ながら、どうしてこう何度も引つ掛かるのかなあ。

頭でわかっていても、身体が無意識に反応してしまう。

そつと、千広から差し出された手。私は思わずその手を握つてしまふ……。

それはとても温かくて、柔らかくて

「……また、千広に負けちゃった」

「えつと、何が……？」

その瞬間は、ラブラブ姉妹計画が失敗してしまったことも「まあ、いいか」と思えてしまったのだった……。

……不覚。

「で、今もそんな状態なわけね……。お疲れ様、ヒロ兄」

「お疲れ様、兄ちゃん」

「あははは……」

もう家には帰り着いた私たち。でも、あれからこの手は繋いだままだった。失敗して失った分は他の機会で補う必要があるのだ。

千広分、現在も補給中……。

少しは貯まってきたかな？ ……うん。今、三パーセントくらい。

「……なあ、千広。実は父さんの左手が空いてるんだが」

「あらあら、それなら私が構ってあげましょうか」

「あだだだだだっ！？ 母さん、ギブッ、ギブッ……」

……ああ、お約束。

「本当に懲りないよね、お父さん」

「わかっててやるからね……」

「にゃあ……（やれやれ……）」（注：と、言っているような気がする）

「父さん、大丈夫かな……」

「利き手は右手だから大丈夫じゃない？」

「いや、姉さん。それはちょっと違うような……」

だって、あまりにも普通の光景だもの……。

でも

「どうかしたの？ 姉さん。ボクの顔に何か付いてる？」

普通ってことは、変わらないってことはとても幸せなことなんだなって。最近、わかったんだ……。

「うつん、なんでもないよ……」

もちろん、どうしても変わってしまうこと、変わった方が良くともあるけれど

「なんでも……」

千広には変わらず、ずっと笑顔でいてほしいなと……。そう、思った。

「うがあああああああ！！！」

……お父さん、うるさい。

第十一話 野球少年の夢 前編（前書き）

今回の話以降は一話一話の独立性が高くなっていくと思います。

第十一話 野球少年の夢 前編

それは、突然の出来事だった……。

「速水先輩っ!!」

放課後の帰り支度をしていた時のこと。息を切らせた一人の女の子が私の教室に飛込んできた。

……確か、千広のクラスメイトの子よね？

千広を呼びに行った時に何度か見た覚えがある。

……ということは。

「速水先輩……。よかった、まだ教室にいて……」

その子は私の姿を見付けると、ほんの少しだけ安心したようなそぶりを見せた。でも

「……千広に何かあったの？」

彼女が私を訪れてきたということはそれ以外考えられない。

「は、はい……。千広君が、千広君が」

「千広がどうしたの!? 急いで落ち着いて、ゆっくり早く話してっ……!」

「おいおい深雪、それはさすがに無茶だ……」

「深雪ちゃんも、一度落ち着いて……」

春香と理奈の私をなだめるような声が聞こえるけど、それどころじゃない。落ち着けるわけがない。

「千広君が、野球部の人たちに連れていかれちゃって……」

……野球部。

「場所はわかる!？」

「すみません、向こうの階段の方にとしか……」

「わかった。後は私なんとかするから」

それを聞くやいなや、私は身を翻して教室を飛び出した。「深雪ちゃん!？」「ちよつと、深雪!！」と私を呼ぶ声を置き去りにして……。

……あそこ？

走り出してすぐに目についたのは、野次馬といった感じの生徒の集まり。それらが見つめているのは階段の踊り場の方。

『あ、あの。やめて下さい……』

まだ少し距離があるためか小さくしか聞こえなかったけど、私が聞き間違える筈がない。千広の、声……。沸々と怒りの感情が沸き上がってくる。

一体どうしてくれようか野球部……。とりあえず、二度と五体満足でグラウンドの土を踏めると思うなよ？

そんな私の心情は顔にも現れているのか、私に気が付いた野次馬たちは一斉に道を空ける。……毛散らす手間が省けた。

場所はもう目前。後は角を曲がればすぐ。早く千広を助け出して、その後は徹底的に

「ちよつと、野球部!! 千広に手を出して、まさかただで済むと思っ……て……?」

「あ、姉さん……」

叩きのめそうと思っていたのに……。

「えつと……。あれ？」

一体これはどういう状況ですか？

確かにそこには千広を囲む男子たちがいた。一、二、三……全部で十一人。みんな坊主頭で、上下とも白を基調としたユニフォームから話の通り野球部だろうということもわかる。

ここまでは別におかしなところは無い……。

ただ

全員が土下座のスタイルというのはどういうことなのだろうか？

「……千広？」

「ボクにもよくわからないんだけど、次の休みの日に隣町の学校と練習試合があるらしくて……」

その時にマネージャーとして参加してほしいと頼まれたと千広は続けた。

「……どうして？」

「それには俺からお話させていただきますっ！！」

そう言って、千広の目の前で土下座をしていた部員がガバツと頭をあげた。

「ちなみに俺はキャプテンの佐藤です」

いえ、それは別に聞いてないですが……。

これ以上話の進みが遅くなるのも嫌だから、野暮な突っ込みはよしておく。

「まず、今度隣町の学校と練習試合を行うというのは先程お話ししたとおりなのですが」

そこで一度言葉を区切った加藤さん……だっけ？ は少し溜めた後

「あそこには本当に腹の立つやつがいました……」

強く感情を込めてまた話し始めた。

「キャプテンで四番でエース。……まあ、それは別にいいんです。でも」

「でも？」

「あの野郎、あろうことかマネージャーと付き合ってるんですよ！
？ しかも可愛い上に幼馴染みときたもんで。許せますか？ 許せませんよね！？」

「……………」

「……いや、同意を求められても困りますが。

「許せないぞー！！」

「もてることはそれだけで罪だ！」

「もてるやつは死ねばいいのにっ！ ううっ……………」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

と、千広。うん、最もな意見。

「例え試合で勝っても勝負に負けては意味がないんですよ」

……もはや最初から負けてる気がするの、は気のせいかな？

「他の女子に頼んでみるとかは……」

「あははは……。俺たちに女子の友達なんて一人もいませんよ」

……気のせいじゃないみたい。駄目だ、この人たち……。

私と千広はそつと溜め息を吐いた。

正直、彼らとは初対面。そこまで千広がしてあげる義理なんかも全くない。……本音を言うと、せつかくの千広との休日が潰されるのも面白くない。

だから、嫌味のひとつもと思って聞いてみた。

「それって……。マネージャーってそんなに大事なものなんですか？」

……って……。だけど

「傍から見れば馬鹿らしいことに思えるかもしれませんが……。でも、俺たちにとっては本気になるに値することです」

返ってきたのは私の予想に反した答え。声も本当に同一人物なのかと思える程に真剣なものに変わっていた。

「男には絶対に譲れない、譲ってはいけない場面がある。……親父の受け売りですが」

今までと打って変わって、表情も真面目さを伺わせる……斎藤さん？ ……えと、キャプテン。

「今回は正にその時じゃないかと思ってます。例え、プライドを捨てても絶対に……」

「佐藤さん……」

……そうだ、佐藤さんだった。

「だから、元々は男だった速水君ならもしかしたら俺たちの気持ちわかってくれるんじゃないかって。みんなと相談して決めたんで

す。すみません、こちらばかりで勝手に……」
話を終えた佐藤さんは、少しきまりが悪そうに視線をそらして……。そのまま、しばらく黙ったままだった。

「……いいですよ」

「えっ!？」

少しの間、沈黙が続いた後……。

「ボクで力になれるのなら……」

「本当ですか!？」

千広は、はつきりと引き受けるって答えた。

「いいの? 千広」

「うん。残念ながら野球部の皆さんの気持ちはわからなかったんだけど……」

そう言って、千広はちよつと苦笑い。

「ただ、『男には絶対に譲れない、譲ってはいけない場面がある』って言葉はちよつとだけわかる気がしたから……」

「そっか、そうだね……」

千広には男の子の一面もあるのだから

「だから、なんか応援してあげたいなって」

「……うん」

少し共感できる場所があつたのかもしれない。

「ありがとうございます!! よっし、これでドローだ。後は試合に勝って勝利といくぞ!!」

「……おおおおおお!!」

何だか不思議。さっきまでは興味もなかった筈なのに、今では野球部に頑張っしてほしいなって思ってる私がいる。

きつと、千広がマネージャーをするって決めたからだけど……。

千広はきつと一生懸命にお手伝いをする筈だ。真面目な子だもん。それなら

「あの……」

「はい？」

「私も一緒に行ったら駄目ですか？」

私は、千広のことを応援してあげたい。そう、思った……。

「「「……」」」

えっ、あれ？ 駄目？

「「「きたあああああああつ！！」」」

……はい？

「まさかお姉さんまでも！！」

「これ、勝ち確定じゃねえか？」

「もう試合負けてもいいかも……」

「ばっか、ここは試合にも勝って完全勝利を目指すところだろ」

「俺、マネージャーにホームランを捧げるわ」

「あ、ずりい。じゃあ俺は……」

……えっと、あれ？ さっきの真面目な空気は？

「……ねえ、千広？」

「姉さんの考えてることはわかるけど……」

「「「はあ」」」

「……やっぱり男の子ってよくわからない。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4542m/>

私の弟姫

2010年10月9日12時11分発行